

京都大学	博士（文学）	氏名	倉部 慶太
論文題目	A Grammar of Jinghpaw, from Northern Burma		
（論文内容の要旨） 本論文は、ジンポー語を対象とした共時的記述文法である。この言語は、北東インドから北部ビルマ、中国雲南省西部にかけて居住するジンポー人によって話される言語である。ジンポー人の大部分は北部ビルマに居住し、当該地域における人口は 63 万人程度と推定されている。ジンポー語は系統的にシナ・チベット語族チベット・ビルマ語派に属し、その中でも特にルイ語群に属する言語と親縁性を示すとされる。 本論文は全 12 章からなり、音韻論、形態論、統語論を扱った第 2 章から第 9 章、古い段階の動詞語尾を扱った第 10 章、借用語を扱った第 11 章、言語接触を扱った第 12 章より構成され、付録としてテキスト、語彙集、借用語語彙集が付いている。 第 1 章は、ジンポー人の自称と他称、ジンポー語の言語類型論的特徴、北部ビルマの言語状況、シナ・チベット語族におけるジンポー語の系統的位置、ジンポー語の方言、先行研究のレビューなどの紹介を行っている。特に、ジンポー語方言に関する記述は論者独自のものであり、これまで通時的観点からこの言語の方言を考察した研究は皆無であったが、論者は主に音韻改新に基づき、ジンポー語諸方言を南部方言群と北部方言群に分類するという新しい分類を提案している。 第 2 章は、ジンポー語音韻論を扱っている。子音、母音、声調に関して音素設定の根拠となる最小対や各音素の頻度を提示し、音節構造と語構造の特徴をまとめている。(形態)音韻規則として、成節鼻音の逆行同化、非有気音化、声調拡散と同化、二音節語化、一音節半語化、融合などを記述している。これまで個別の音韻現象と考えられていた複数の接頭辞に見られる交替を非有気音化という規則で一般化した点、相補分布に基づき成節鼻音に出現する 3 種の声調が 2 種の基底形に還元可能であることを示した点など論者独自の分析が示されている。 第 3 章は、ジンポー語の形態論の記述を行っている。語形成規則として、接辞付加、複合、重複、ゼロ派生を詳述し、この言語において複合と重複が最も生産的な語形成規則であるとしている。複合語と句の相違を形態的緊密性などの観点から分析している。並列複合語の構成要素の順序の一つとして shorter first rule を提示した点、同族名詞動詞構文の成立に接辞付加、複合、重複、ゼロ派生などの規則が複雑に関与していることを示した点など論者独自の視点が盛り込まれている。 第 4 章では、品詞分類を提示している。形態統語的観点から品詞を、名詞、動詞、副詞、間投詞、助詞の 5 つに分類する独自の分類を提示し、形容詞やコピュラはその形態統語的特徴から動詞の下位範疇に位置付けられるとする。			

第 5 章は、名詞句を扱っている。閉じた類を成す名詞として、人称代名詞、指示詞代名詞、疑問代名詞、数詞、類別詞、場所名詞、後置詞を設定している。これまで詳述されていなかった、普通名詞も含めたこれら名詞の下位類とそれらの修飾要素との共起関係を詳しくまとめ、代名詞類は先行する修飾要素とは共起せず、後続する修飾要素とのみ共起するなどの一般化を行っている。

第 6 章では、格標示体系の記述を提示している。被動者の格標示にはゼロと対格の交替が認められ、格の交替は有生性階層における動作主と被動者の相対的有生性に基づいた交替であることを示し、ジンポー語の対格は一般言語学における **differential object marking** と同等の機能を担うとしている。ジンポー語は複数の属格と場所格を有するが、その使い分けは標示する名詞句の意味役割や文体に基づくことを示している。

第 7 章は、動詞複合を扱い、語彙アスペクトや結合価に基づく動詞の分類、動詞連続と助動詞の詳細な記述、アスペクト標識とムード標識の記述を提示している。周辺言語同様、ジンポー語は動詞連続構文を多用する言語であり、連続する動詞間の意味関係や従属節標識による言い換え可能性などに基づき、動詞連続を継起関係、付随関係、目的関係に分類する独自の分類を提示している。動詞連続全体の項構造は構成要素の項構造の組み合わせに基づくが、同一の意味役割を持つ名詞句は構成要素間で共有されなければならないという厳密な制約があるとする。通言語的に認められるのと同様、ジンポー語の動詞連続には脱範疇化が観察され、V1 は副詞へと V2 は助動詞へと脱範疇化する傾向にあることを示している。ジンポー語はアスペクト卓立型言語であり、アスペクトは有標の変化相と無標の非変化相による二項対立を成すが、変化相は事態・状況が新しい局面に変化したことを述べる場合に用いられるとする。変化相は開始点と終結点いずれも示しうるが、その相違は文の **telicity** に基づくという独自の一般化を示している。

第 8 章は、**Other categories** と題して副詞、間投詞、副助詞、終助詞の記述を行っている。ジンポー語の副詞の大部分は動詞由来であり、副詞は接辞付加や重複により共時的に、または動詞連続により通時的に動詞から派生されたことを示している。

第 9 章は、従属節と等位節を記述する。ジンポー語の特筆すべき特徴の一つとして名詞節の多機能性を挙げ、名詞節がそれ自体で補文、関係節、副詞節として機能しうることを示し、この種の名詞節の多機能性が周辺のチベット・ビルマ諸語にも観察される現象であると述べている。一次資料に基づき、主要部内在型関係節など先行研究では知られていなかった構造がジンポー語に認められることを示している。

第 10 章は、ジンポー語の古い段階において見られた動詞語尾の記述を約 100 年前の古い文献資料に基づいて記述している。動詞語尾の形態素分析は先行研究では十分になされていなかったが、論者は動詞語尾のテンプレートとして、数-人称-方向-相-法を新しく提示している。動詞語尾のうち、特に人称を表す要素は多様な異形態を示し、

多くの先行研究でそれ以上分析不可能なものと扱われていたが、これら異形態が複数の異形態規則および法を表す形式などに条件づけられて変化していることを示している。所有者名詞句や中核項名詞句と動詞の一致に文法役割のみならず人称階層も関与的であることを豊富な実例を用いて示している点も特徴的である。

第 11 章 は、ジンポー語における借用語を記述している。借用語の主な供給源は、シャン語、ビルマ語、漢語であるが、特にシャン語からの借用が著しいことを述べている。本章では先行研究では行われていなかったジンポー語におけるシャン語借用語の借用語音韻論の体系的検討を行っている点に特徴がある。

第 12 章は、ジンポー語が共通語として用いられるカチン民族における言語接触の概要と例示を語彙、音韻論、形態論の観点から試みている。カチン民族によって用いられる言語のうち、ザイワ語は系統的にはビルマ語との親縁性を示すにも関わらず、その語彙と音韻論にはジンポー語からの強い影響が観察されることを示している。

本論文には付録としてテキスト、語彙集、借用語語彙集が付いている。特に借用語語彙集は、ジンポー語における約 500 語のシャン語借用語、約 250 語のビルマ語借用語、約 120 語の漢語借用語を提示し、また、ジンポー語が供給源となる借用語を約 300 語提示しているが、この語彙集は当該地域の他言語を対象とする研究者にとっても有益なものとなっている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、ジンポー語を対象とした共時的記述文法である。この言語は、北東インドから北部ビルマ、中国雲南省西部にかけて居住するジンポー人によって話される言語である。ジンポー人の大部分は北部ビルマに居住し、当該地域における人口は 63 万人程度と推定されている。ジンポー語は系統的にシナ・チベット語族チベット・ビルマ語派に属し、その中でも特にルイ語群に属する言語と親縁性を示すとされる。

本論文は、論者が 2009 年から 2015 年までの期間に断続的に行った 13 回に及ぶ北部ビルマにおける現地調査により採集した一次資料に基づいている。これまでビルマに分布するこの言語の方言を扱った文法には Ola Hanson の先駆的な研究 (1896, 1917)、Hertz (1895, 1911)、Puzitskiii (1968) 等による簡易文法があるが、本論文は最も網羅的・体系的な記述を提示した点、現代言語学の枠組みに基づき多くの一般化や新事実の提示を行っている点などに特徴がある。また、ビルマのジンポー語と比較的に近い関係にある中国のジンポー語を扱った文法には、戴・徐 (1992)、戴 (2012) 等があるが、方言や依拠する資料の相違に加えて、本論文はこれら先行研究で詳細に扱われなかった名詞句構造や動詞連続などの文法現象を詳しく扱っている点、非文を分析に用いることによってより深い分析を施している点、独自の分析による多くの一般化や新事実の提示を行っている点などに特徴がある。

本論文は全 12 章からなり、音韻論、形態論、統語論を扱った第 2 章から第 9 章、古い段階の動詞語尾を扱った第 10 章、借用語を扱った第 11 章、言語接触を扱った第 12 章より構成され、付録としてテキスト、語彙集、借用語語彙集が付いている。英文で、本文 463 ページ、付録を含めると 650 ページを超える大部の文法書となっている。

本論文の特長としてまずあげられるのは現象の一般化に際しての議論の精密さと観察の徹底的な網羅性であろう。音韻論の章では単に最小対を挙げるだけにとどまらず、すべての母音、子音の組み合わせを観察し、その分布を頻度とともに挙げて、それにより一般化を行っている。(形態)音韻規則として、成節鼻音の逆行同化、非有気音化、声調拡散と同化、二音節語化、一音節半語化、融合などを記述しているが、これまで個別の音韻現象と考えられていた複数の接頭辞に見られる交替を非有気音化という規則で一般化している。また、相補分布に基づき成節鼻音に出現する 3 種の声調が 2 種の基底形に還元可能であることを示している。これらも要素の分布の徹底的な観察により一般化を説得的に示している点が特にすぐれている。

次にあげられる特長は、語構成、統語論記述のすぐれている点であろう。記述文法では主として音韻論、形態論（特に屈折、派生）を扱い、複合語形成や統語論に関しては記述が簡単になる場合が多い。それに対し、本論文は、優れた複合語形成論、統語論を展開しており、否定、アスペクト、モダリティ、ムードの標識に関しても、また複文の構造や疑問文の構造などに関しても、最新の言語理論の知識を使ってすぐれた分析、記述を行っている。特に第 9 章で扱われた従属節と等位節の記述はすぐれて

いる。論者はジンポー語の特筆すべき特徴の一つとして名詞節の多機能性を挙げ、名詞節がそれ自体で補文、関係節、副詞節として機能しうることを示し、この種の名詞節の多機能性が周辺のチベット・ビルマ諸語にも観察される現象であると述べている。また、論者は、一次資料に基づき、主要部内在型関係節など先行研究では知られていなかった構造がジンポー語に認められることを示している。

3つ目はチベット・ビルマ比較言語学に関する正確な知識とそれらの共時的な記述に対する利用である。記述の随所にチベット・ビルマ祖語の形式があげられ、また、ビルマ文語他のビルマ諸語の形式、周辺の諸言語の形式との比較がなされる。このような古い形式や他の言語への言及が適切になされ、この言語の現象への理解を助けていることも本論文の特長と言える。

第10章では、ジンポー語の古い段階において見られ、現在はなくなっている動詞語尾の記述を約100年前の古い文献資料に基づいて記述している。動詞語尾の形態素分析は先行研究では十分になされていなかった。論者は動詞語尾のテンプレートとして、数-人称-方向-相-法を新しく提示した。それにより動詞語尾のうち、特に人称を表す要素が多様な異形態を示し、多くの先行研究でそれ以上分析不可能なものと扱われていた形式が複数の異形態規則および法を表す形式などに条件づけられて変化していることを初めて明らかにした。所有者名詞句や中核項名詞句と動詞の一致に文法役割のみならず人称階層も関与的であることを豊富な実例を用いて示している点もすぐれている。

第11章の借用に関する議論、第12章の言語接触の議論、付録の借用語のリスト、英語-ジンポー語の語彙リストも非常に有益である。

以上みたように、これだけの密度で、しかも説得力のある記述を行った記述文法書はまれであり、チベット・ビルマ言語学に対する貢献は大きい。

しかし、大部な文法書であるため、問題も散見する。たとえば、語類のうち名詞の下位分類として挙げられた後置詞(postposition)はどちらかと言えば形式名詞とでも言ったほうが正確である。また、その英語のグロスを前置詞によって与えたため、非常にわかりにくい記述になっている。概して英文は読みやすいが、例文の訳等には不適切なものも多い。しかし、これらは本論文の価値を大きく減じるものではなく、本論文を出版する際、修正が可能である。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成28年2月23日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。